「理想を忘れない～菩薩の願い」

## ●させていただく

今年の抱負を考えてみました。
三日坊主になるのは知れているのですが、それならば、なかなか実現できないことを掲げてみたいと思いました。
浅草の浄土真宗のお寺に生まれた永六輔（1933～2016）さんは、1997年に放送されたNHK『ラジオ深夜便』の番組内で次のようなことを語っていらっしゃいました。
アミダさまは、誰かを救うことで自分も救われることを根本の願いにされるお方。
ナムアミダブツとは、そういう願いを信じます、付いていきます、その生き方が好きです。
今風に言えば、ボランティアをするということ。
そういう生き方は、人に押し付けるのでなく、お陰さまでやらせていただくということ。

## ●通信簿という物差し

お陰さまというのは、子に恵まれたから親になれた、だから、子どもを育てさせていただくという姿勢で、具体的に言えば、自分たちの物差しを押し付けないということでした。
永さんは、小学生の頃から成績がよかったので通信簿をご両親に見せるのが楽しみでした。ところが、住職であるお父様は、「これは学校のつけた成績で、お父さんとは関係がないから見ない」と本当に見てくれません。そのように、出来合いの物差しをたよりにされなかったそうです。
さて、永さんは、いざ、ご自分のお子さんを育てる時、同じようにしようとしたけれども、本当に難しかったそうです。
成績という世間の物差しに振り回されたり気にしないで、子どもを育てさせていただいているという姿勢をとり続けていけたのは、両親に学んだ生き方であり、遠く言えば、法然聖人、親鸞聖人からずうっと教えが伝わったお陰だと言われています。

## ●誰かを救う

事件が起きた時、犯人がいつも悪者か、なぜ彼らはそうせざるを得なかったのか。
原子力発電所に津波が襲う時、津波が悪者なのか、原発は本当に守るべきものか。

「反対の立場に置いて考える」、永さんは、自分にこのような思いが生まれるのも、誰かを救うという願いが根本にあったからだそうです。それは、世間の物差しを少し離れた願いに身をおいているように思います。
私は、「アーユス仏教国際協力ネットワーク」という仏教の国際協力NGOに関わり続けています。先日、“すべての人に、新型コロナに対する医療アクセスを！”という提言に賛同をしました。
その内容を自分なりにまとめました。

ワクチンをめぐる国家間の争奪戦で、世界人口の半数以上を占める途上国･新興国は、確保に不安と課題を抱えています。財源もなく、以前からのエイズやマラリア、その他感染症に国内の様々な資源を割かなければなりません。
そんな途上国･新興国の公衆衛生を脅かしているのが「医薬品の特許」問題で、圧倒的な経済格差の中で特許保護だけが追求されると、命をつなぐ医薬品が貧困者に届かないことになりかねません。
さらに新型コロナウイルス感染症は全世界的な大流行で、一部の経済大国だけで感染が抑えられても、途上国･新興国で感染が拡大し続ければ、ウイルスは巡り巡って私たちの日常に蔓延（まんえん）し続けます。豊かな国が、ワクチンの自国中心主義を押し通せば、本当の意味での感染抑制はできません。

こちら側の物差しを立てれば、向こう側が成り立ちません。しかし、お陰さまを忘れていると、共に「いのち」を蝕（むしば）んでしまいます。
アミダさまとそのほかの多くの菩薩さまの共通の願いを四弘誓願（しぐぜいがん）といいます。
その内容は、私たちが考えると完成不可能なことをまことの理想として、それを目指す生き方を願いとされています。

「衆生無辺誓願度（しゅじょうむへんせいがんど）、煩悩無尽誓願断（ぼんのうむじんせいがんだん）、法門無量誓願学（ほうもんむりょうせいがんがく）、仏道無上誓願成（ぶつどうむじょうせいがんじょう）」

人間は数知れないが誓ってすくおう
煩悩は尽きないが誓って断とう
仏法は量り知れないが誓って学ぼう
さとりはこの上ないが誓って成し遂げよう

自分の都合を満たす願いを抱えている私たちですが、それを超えた仏さまの願いが私たちに向けて願われている、だからこそ、そう願う生き方を抱負にしたいと思いました。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。